慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	慶應義塾図書館とインキュナブラ : 収集、整備、公開へ
Sub Title	Keio University Library and incunabula : collecting, cataloguing, and unveiling
Author	徳永, 聡子(Tokunaga, Satoko)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2008
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 英語英米文学 No.52 (2008.) ,p.59- 82
JaLC DOI	
Abstract	Digitization is increasingly being employed as a means of preserving, improving access to, and advancing research on manuscripts and rare books. In line with this trend, a project to digitize and compile a database on such holdings in the Keio University Library (KUL) has been undertaken by a group of scholars and librarians at Keio University. As a first step, the Keio Incunabula Project, which focuses on the digitization of incunabula codices, was started in 2003; this paper offers a survey of its activities and achievements. The first task of the Project was to compile a comprehensive list of KUL incunabula. This entailed not only checking original materials held by KUL, but also examining all available resources relating to the KUL collection. This broad survey has succeeded in clarifying bibliographical details of the works while also tracking the chronological development of the collection for the first time. For example, the first incunabule codex acquired by KUL is a copy of Justinus's Epitomae, printed by Christophorus Valdarfer in 1476 [KUL shelfmark 120X@468@1]. The exact year of acquisition is not known, but we can surmise from available information that it came into the possession of KUL between 1952 and 1964. The next task of the Project was to prepare digital images. The aim was not to produce full digital facsimiles, so only representative pages (such as the title page, colophon, and illustrations) have been digitized with the collaboration of the HUMI Project, Keio University. The final output has now been published in the Digital Gallery of Keio University Library (http://project.lib.keio.ac.jp/dg_kul/). The incunabula section contains each copy's bibliographical description, a commentary (prepared by scholars and graduate students of Keio), and digital images. The Japanese version appeared in March 2006,

	and the English version will come in April 2008. In future, the members of the Project hope to extend the scope of this Digital Gallery, for which further collaboration between librarians and scholars will be essential.
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030060-20080331-0059

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾図書館とインキュナブラ
――収集、整備、公開へ[1]――

徳　永　聡　子

慶應義塾図書館は、和漢書・洋書ともに稀覯書と呼ばれる歴史的価値の高い資料を数多く所蔵する。洋書の稀覯書のなかには手稿本やグーテンベルク聖書など、古書市場、書物研究において重要な資料も少なくない。近年ではこうした蔵書を扱った展示企画が盛んに行われ、コレクションの充実ぶりが紹介される機会も増えつつある。しかしながら、専門的な知識を要する書誌学的調査に基づいた目録整備は必ずしも進んではおらず、慶應義塾が所蔵する稀覯書の総数、全体像、各書物に関する仔細な情報については多くが未調査のままであった。

こうした現状を打開すべく、2003 年の 7 月、文学部の教員と図書館スタッフが集い、図書館の洋書稀覯書の徹底した所在調査とデジタルアーカ

1　本稿は、筆者がこれまで慶應義塾図書館所蔵のインキュナブラとそのデジタルアーカイブ化に関して行った一連の口頭発表ならびに寄稿文に大幅に加筆、修正を加えたものである（詳細は本稿末尾、付録 2 にまとめた）。本プロジェクトの遂行には三田メディアセンターのスタッフをはじめ、多くの慶應義塾大学関係者からさまざまな形でご支援を賜った。なかでもデジタルギャラリー公開に至るまで多大なるご尽力・ご助言を下さいました、慶應義塾大学文学部・髙宮利行教授、松田隆美教授、HUMI プロジェクト研究員・樫村雅章氏、前環境情報学部教授・澁川雅俊氏、三田メディアセンター・入江伸氏、市古健次氏、筒井利子氏、吉田真希子氏、山田摩耶氏、田中真紀氏、村松桂氏に、この場をお借りして心より御礼申し上げます。

イブの構築を目指す方針が具体的に検討された。その最初の試みとして、インキュナブラ（15 世紀末までに活版印刷術で刊行された初期刊本）を対象とした「インキュナブラ・プロジェクト」が 2003 年 8 月に発足した。義塾におけるインキュナブラの所蔵調査を出発点としたこのプロジェクトは、その後「デジタルアーカイヴ・リサーチセンター（DARC）」との共同で進められ[2]、現在では図書館ホームページのデジタルギャラリーでその成果を一般に公開している[3]。

本稿では、このインキュナブラ・プロジェクトで、義塾図書館のコレクション調査とデジタルギャラリー公開準備に携わった立場から、その調査内容と成果についてまとめたい。なお書物は形態上の特徴から、冊子本（codex）と零葉（leaf）の 2 つに大別することができるが、本稿執筆時までは冊子本のみを対象としており、零葉の調査は今後の課題である。

1. 所蔵調査と基礎調査

インキュナブラ・プロジェクトが最終的に目指すところは、義塾図書館が所蔵するインキュナブラコレクションのデジタルアーカイブの構築である。当然のことながら、貴重書アーカイブの構築は、対象とする蔵書の内容の把握を前提として進められる。しかし、義塾が所蔵するインキュナブラについて、それらを含んだ展示会目録などの刊行はあったものの、所蔵内容を網羅する総合目録などは存在しなかった。このためアーカイブ構築に先立ち、慶應義塾図書館の所蔵内容を明らかにするところから始める必要があった。この調査で扱った主要資料は以下の通りである[4]。

2　慶應義塾大学デジタルアーカイヴ・リサーチセンターの活動については <http://www.darc.keio.ac.jp/> に詳しい。

3　慶應義塾図書館デジタルギャラリー（DG KUL）<http://project.lib.keio.ac.jp/dg_kul/index.html>。このデジタルギャラリーでは、インキュナブラ以外にも義塾図書館のさまざまな貴重資料を公開している。

4　一般に公開されている資料は付録 1 に詳細をまとめた。

1）過去に行われたインキュナブラの国内所在調査の結果
2）稀覯書展示会目録
3）カード目録（貴重書室で保管）
4）OPAC の業務用データ
5）義塾図書館刊行の冊子体洋書目録
6）義塾の定期刊行物（『三色旗』、『三田評論』などには貴重書の解題や寄贈情報がある）
7）原簿（図書館の購入・収蔵記録）
8）高額図書購入に関わる図書委員会議記録

今回、こうした資料を手がかりに、慶應義塾のインキュナブラの所蔵を徹底的に調べ、書物の受入れにまつわるさまざまな情報も同時に整理することができた。その結果、インキュナブラの所蔵数だけでなく、後述（次項）のとおり義塾図書館におけるコレクション形成史をも紐解くことができたことはきわめて意義深い。

義塾図書館のインキュナブラの所蔵を調べるにあたり、情報量という点でもっとも有益だったのは、過去に実施された国内所在調査の結果である。欧米では 19 世紀末にフランスで始まったのを契機に、第二次世界大戦までに各国でインキュナブラの全国調査の取り組みが盛んに行われ、現在に至るまでその目録刊行が続いている[5]。一方、日本でインキュナブラという概念が研究者のあいだに広まったのは大正期で、全国的な所在調査の実施となるとさらに遅い。日本初のインキュナブラ全国所在調査は、太平洋戦争後の 1952（昭和 27）年に関西大学図書館の天野敬太郎氏が行ったアンケート調査である[6]。天野氏は、主要な都道府県の図書館、大学図書

5　イギリスの BMC（*Catalogue of Books Printed in the XVth Century Now in the British Museum*）、ドイツの GW（*Gesamtkatalog der Wiegendrucke*）など。
6　日本図書館研究会刊行の『図書館界』4.2（1952）には、調査協力の依頼広告が掲載されている。

館、専門図書館など150館に対してインキュナブラの所在を問い合わせた。その結果、一橋大学付属図書館、京都大学付属図書館・経済学部・法学部、天理図書館、上野図書館、東京大学、東洋文庫の8つの図書館から返答があり、総計22冊の冊子本と2枚の零葉のインキュナブラが確認された[7]。しかしこの時は、慶應義塾図書館からの返答はなく、当時義塾にはインキュナブラの所蔵はなかったことが推察される。

第2回全国所在調査は、1964（昭和39）年に天理図書館館長であった富永牧太氏により実施された。その調査結果は天理大学付属天理図書館の雑誌『ビブリア』に4回にわたり報告されている。それによると、第1回の全国調査時に回答のあった諸大学に加え、3つの図書館と2つの個人コレクションを含む総計13カ所から報告があり、冊子本69版、71コピーが確認された[8]。特筆すべきは、慶應義塾図書館から冊子本1冊、零葉1枚の所蔵の回答があったことだが、この点については次項で詳しく触れたい。

富永氏の調査以降、その継続者は登場することなく長い歳月が流れた。しかし1988（昭和63）年、日本のインキュナブラ研究を国際的レベルにまで引き上げた雪嶋宏一氏が第3回全国所在調査に着手した。雪嶋氏は所属の早稲田大学図書館の調査を手始めに、東北大学理学部、天理大学付属天理図書館、明星大学児玉記念図書館など、全国44カ所の図書館、研究所、個人コレクションの調査を1994年7月まで行い、297版348コピーのインキュナブラを確認した。雪嶋氏が1995年に雄松堂書店から上梓した『本邦所在インキュナビュラ目録』（通称IJL）には[9]、慶應義塾図書

7　天野敬太郎「本邦所在インキュナビュラ総合目録」『図書館界』4.3（1952）, 114–16。

8　富永牧太「インキュナブラの本邦所在目録 I–IV」『ビブリア』29（1964）, 110–03; 30（1965）, 128–13; 31（1965）, 144–28; 33（1966）, 128–23。

9　Koichi Yukishima, ed., *Union Catalogue of Incunabula in Japanese Libraries* (IJL) ／ 雪嶋宏一編『本邦所在インキュナブラ目録』（Tokyo:

館所蔵本 40 版 40 コピーが収録されている[10]。

雪嶋氏はその後も全国調査を続け、2004（平成 16）年には IJL の改訂版を出版した[11]。この第 2 版 IJL によると、国内 62 の図書館に総計 383 版 466 コピーが、また慶應義塾には 49 版 49 コピー（斯道文庫寄託本 1 版 2 コピーを除く）の所蔵が確認されている。また雪嶋氏の研究活動により、日本におけるインキュナブラの所在情報も大英図書館にある ISTC（Incunabula Short Title Catalogue; インキュナブラ目録の国際的スタンダード）の編集室に定期的に報告されるようになった。これにより日本のインキュナブラ研究の国際的な認知度が高まったといっても過言ではない。

本プロジェクトの所在調査の大部分は、雪嶋氏が 2004 年に発表した IJL 第 2 版の出版直前に進められていたため、当時、情報交換は十全にはできなかった。しかし上述のとおり義塾内にある資料を駆使した独自調査を行った結果、筆者は 2003 年度末の時点で、慶應義塾大学に 52 版 52 コピー（斯道文庫の 1 版 2 コピーを除く）のインキュナブラの所在を確認し、後に雪嶋氏へ補足情報を報告することができた。慶應関係者が所在調査を行なったことで、全国規模の調査では確認しきれなかったコピーの再発掘へとつながったと言えよう。なお本稿執筆の 2008 年 3 月現在では、慶應義塾大学全体で、総計 55 版 55 コピーの冊子体のインキュナブラ（科学

Yushodo, 1995）。

10 これ以外にも、斯道文庫の永青文庫寄託本（旧コルディエ文庫）には 1 版、2 コピーが所在する。旧コルディエ文庫とは、「中国書誌」、「日本書誌」、「インドシナ書誌」の編纂などで名高い、フランスの東洋学者・書誌学者アンリ・コルディエ（Henri Cordier; 1849–1925）の旧蔵書である。欧文による東洋学の研究書を中心に、日本・アフリカ・アメリカの地域に及ぶ地理紀行・文学・芸術・法律・スポーツ等の広い分野の単行本と、歴史・地理の欧文雑誌類、計 1900 点 5000 冊から構成される。1973 年に財団法人永青文庫から斯道文庫に寄託された。

11 Koichi Yukishima, ed., *Incunabula in Japanese Libraries: Second Edition of Union Catalogue of Incunabula in Japanese Libraries* (IJL2)（Tokyo: Yushodo, 2004）。

研究費購入本含む、但し斯道文庫寄託本は除く）の所在を確認している。

所蔵調査の結果から慶應義塾のインキュナブラコレクションの規模があきらかとなったが、アーカイブの構築において最も重要なのは各書物の詳細な書誌情報である。特にインキュナブラの場合、書物のタイトルなどの出版情報がタイトルページや刊記に記されているとは限らず、また記載されていたとしても、その情報が正確かどうかは場合によって検討の余地がある。このため現物から得られた出版・書誌情報を専門の目録の記述と照らし合わせ、いつ、どこで、誰によって印刷されたどの版であるかを同定する作業が必須である。そこで所蔵調査がひと区切りついた段階で、筆者はデジタルアーカイブの基盤となる各書物に関する基礎調査を行った。具体的には、各書物を実際に調べ、BMC や ISTC など基本的な書誌目録のデータをもとに著者名、書名、訳者・注釈者・編者等、印刷地、印刷者、印刷年、判型などの書誌データを書物ごとにまとめた。

一方、書物は同じ版であっても、その辿って来た歴史によって実にさまざまな側面を帯びる。例えばインキュナブラなど西洋の古版本は未製本のままで販売されたていたため、各コピーによって装訂はまったくことなる様相を呈する。また印刷本であっても初期のインキュナブラには、写本に似せて手書きで頭文字や装飾が施されたものもある。さらには読者によってさまざまな書き込みがなされている場合もある。特に最近は書物の受容史の観点から、書物の書き入れや来歴の研究に注目が集まっており、書誌や出版情報だけでなく、「モノ」としての書物の側面を探求する意義が重要視されつつある。こうした個別の書物の付加情報を重んじる流れは、例えば 2006 年に刊行されたばかりの BMC 第 11 巻（イングランド）の編集方針にも反映されている。

そこで今回行った目録制作のための調査では、近年の研究動向を踏まえ、手書きによる装飾頭文字や挿絵の有無、書き込み、欠葉、ペン・ファクシミリなどによるページの追補、装訂、来歴など、各コピーに特化したデータも可能な範囲で記録を試みた。所蔵機関が書誌目録付きのアーカイブを

構築する場合、このような各コピーに特化した詳細なデータの提供こそが最も期待されるところであろう。

基本的な書誌情報の同定に加え、今回の調査でまとめた詳細データは、すべてデジタルギャラリーのなかで公表している。なかには今後より詳しい調査を要するものもあるが、続くセクションでは現時点までに分かったことから慶應におけるインキュナブラ収蔵の歴史をまとめてみたい。

2. コレクションの形成

いつ、誰によって、何処に、如何なる知の遺産が西洋から伝来されたのかを探ることは、慶應義塾における、さらには日本における西洋文化の受容や発展を考える上できわめて重要である。同様に、慶應義塾図書館にどのようなインキュナブラが今日に至るまで受入れられてきたのか、その収蔵の歴史を示すことは、慶應義塾の図書館史を考える上でも少なからぬ意義を持つのではないだろうか。

最新の研究によると、日本に初めて招来されたインキュナブラは、ハルトマン・シェーデル（Hartmann Schedel）の『ニュルンベルク年代記』（*Liber chronicarum*）をアントン・コーベルガー（Anton Koberger）が1493年に印刷したラテン語版である[12]。これは1881（明治14）年に、津和野藩主亀井家十三代当主茲明が留学先から日本へ持ち帰ったとされている。これに比すると、慶應義塾がはじめてインキュナブラを収蔵したのはかなり遅い。第一号インキュナブラの受入れ年を決定付ける資料は塾内の記録には残っていないが、ある程度の時期は推定することができる。

前述のとおり、1952年に天野氏が実施したアンケートには、慶應義塾図書館からの返答はなく、この時点で義塾にはインキュナブラの所蔵はなかった可能性が高い。一方、富永氏のアンケート調査報告（1964年）

12　現在は東京大学総合図書館が所蔵する「亀井文庫」のなかにある。Yukishima, IJL2, p. 14。

には、慶應が冊子本 1 冊のインキュナブラを有することが記されている[13]。これはローマの歴史家ポンペイウス・トログス（Pompeius Trogus）の著作をユスティヌス（Marcus Junianus Justinus）が抄録したもので、慶應本はクリストフォルス・ウァルダルフェル（Christophorus Valdarfer）がミラノで 1476 年に刊行した版である。この本の書誌情報と一致する本は、慶應義塾図書館の請求記号 120X@468@1 の書物と思われる。

この慶應本の見返しには、2 種類の蔵書票が貼られている。ひとつは白い紙に「Markree Library」と印刷されたもので、この図書室が 1913 年に Bryan Cooper という人物によって再整備（rearranged）されたことが記されている。この Markree Library とは、おそらくアイルランド共和国の北西に位置するスライゴー（Sligo）にある Markree Castle の図書室のことであろう[14]。もうひとつのオレンジ色の蔵書票は神保町にある一誠堂書店のもので、確かな年代は分からないが、関係者の談によると戦前に使われていた可能性が高いらしい[15]。一方、慶應義塾図書館に保管されている原簿（図書館の購入・収蔵記録）には、この本の受け入れに関しては「1979 年 6 月 15 日・未整理より」という記録が残るのみである。

これらの情報を総合すると、かつて Markree Library にあったこのユスティヌスの歴史書は、おそらく 1900 年代前半に古書市場に出回り、何らかの経緯をたどって一誠堂書店の書棚に並んだと推察される。そして

---

13 「1476 Justinvs. | Historici clarissimi in Trogi Pompeii historias... Impressum Mediolani (Milano) per Christophorum Valdarfer Ratisponensem Anno Domini MCCCCLXXVI. | (Hain 9650) Keio」。富永「インキュナブラの本邦所在目録 I」, pp. 110–09。

14 この古城には Cooper 家が 350 年以上居住したが、現在はホテルとして利用されている。ホテルのホームページを参照 <http://www.markreecastle.ie/index.html>。

15 問い合わせに応じて下さった一誠堂書店・酒井健彦社長、ならびにご紹介の労をとってくださいました慶應義塾大学文学部・佐藤道生教授に感謝申し上げます。

1952 年から 1964 年のあいだに、慶應義塾図書館が一誠堂書店から（もしくはさらに別の手を経て）入手した、あるいは慶應関係者によって図書館へ寄贈されたのであろう。この点に関してはこれ以上のところは分かりかねるが、この本より古く慶應に受け入れられた記録を持つインキュナブラは見つかっていない。よって、このユスティヌスの歴史書こそ、慶應義塾が収蔵した冊子本「インキュナブラ第一号」と思われる[16]。

ところで、ユスティヌス本の原簿記録にある「1979 年 6 月 15 日・未整理より」は、1979 年 6 月に何らかの貴重書整理がなされたことを示唆するように思われる。また興味深いことに、この 1979 年に、慶應義塾図書館は 5 点のインキュナブラを購入している。その内 4 点は Cavendish Rare Books というロンドンの古書店から同時期に入手しており、残る 1 点はインキュナブラのなかでも価値の高い英国初期印刷本（ウィリアム・キャクストン（William Caxton）印行『イングランド年代記』（*The Chronicles of England*, 1480）である。ユスティヌスの受入れ経緯については記録不足のため不明な点が多く残るのに対し、1979 年以降に収蔵されたインキュナブラ関しては、手がかりとなる記録が多く残っている。このため今回の調査をきっかけに、ほぼ全点について購入時期、価格、販売・寄贈元、推薦者についてまとめることができた。その情報をもとに、慶應義塾におけるインキュナブラの受入れ点数をまとめたものが表 1 である。

この表が示すように、1979 年の受入れを機に、義塾のインキュナブラコレクションは着実にその数を増やしている。1970 年代から 1996 年 3 月まで図書館の蔵書構築に関わった澁川雅俊氏によると、1970 年代後半以降の図書予算の充実、稀覯書収集の意義を理解する関係者の存在などが、

16　義塾図書館史によると、1942 年 10 月に稀覯書書庫が新設され、太田臨一郎氏が専任担当となった。太田氏は『三色旗』などに塾図書館が誇る稀覯書等について寄稿しており、その記述は義塾図書館の収蔵の歴史を探る上で大変に貴重な資料である。

表1　慶應義塾大学インキュナブラ収蔵数（斯道文庫寄託本は除く）

受入れ年	版数
1952–1964	1
1979	5
1980–1985	13
1986–1990	20
1991–1995	3
1996–2000	5
2001–2005	6
2006–2007	2
合計	55

その成長の背景にあったように思われる。稀覯書収集が義塾の蔵書構築の方針として正式に確立されたのは、1951 年、野村兼太郎館長の指揮のもとであった[17]。この収書方針は、戦後復興事業の投資が続く間一時期中断していたのだが、1975 年頃、大学経営費国庫補助が始まり資料収集財源がふたたび充実されるようになると、1976 年における 2 冊の中世写本（エギディウス・ロマヌス『君主の統治』（Aegidius Romanus, *De Regimine Principum*; 120X@432@1）とアリストテレス（Aristotle）の小論文の合綴本）の収蔵を契機に、稀覯書収集が再開された[18]。当初は、戦前から取り組まれていた西洋経済社会思想史分野や、野村館長時代に重要視された国史・国文学、書誌学関係の資料の補充的収集が中心であったが、次第に洋書稀覯書の分野での開拓も始まった。澁川氏の報告によると、1970 年代後半から 1990 年にかけては、科学史・科学思想関係、『西洋をきずいた書物』（*Printing and the Mind of Man*（1963; 1967; 1983））に掲載の書

17　『慶應義塾図書館史』慶應義塾大学三田情報センター編（東京：慶應義塾三田情報センター, 1972）, 第 5 章 7 節「オリジナル・マテリヤルの収集」, pp. 224–32。

18　澁川雅俊「蔵書の形成」『Media Net』4（1996）, 69–73（p. 72）。

物[19]、近代博物誌関係、中世写本などの収書も進められた[20]。本格的なインキュナブラの収集も、まさにこうした潮流のなかで萌芽したと言えよう[21]。

一方、こうしたコレクション形成を考える際、購入を推薦した人物や古書店との仲介役を務めた人物の存在も忘れてはならない。例えばインキュナブラの場合、中世英文学者・古書収集家でもある文学部・高宮利行教授をはじめ、書物の世界に精通した教員や図書館スタッフの尽力によって収書が進められた。このことは図書館に在る記録が語るところである。もちろん欧米の著名な図書館と比べると、義塾のコレクションは組織的に構築されてきたとは言い難い。また 1990 年代のバブル経済の崩壊後にはインキュナブラの受入れ数も激減している。しかし現在に至るまで、途絶えることなく蔵書の数が増加してきたことは、原資料による研究環境の整備の伝統が継承されてきたことを映し出していると言えよう。特に、科学史・科学思想関係、英国初期印刷本、時禱書などの充実は、この分野の義塾における研究の発展とも無関係ではない。

義塾のインキュナブラコレクションを国際的な標準に照らし合わせると、その規模は決して大きいとはいえないが、日本国内ではトップクラスの蔵書数を誇る。また個々の書物の詳細を調べると、その内容も実に多彩であり興味深い。書物の来歴を例にとっても、世界的に名高い愛書家の旧蔵書が複数見出される。例えば先に触れたキャストン版『イングランド

---

19 J. カーター , P. H. ムーア編『西洋をきずいた書物』西洋書誌研究会訳（東京：雄松堂書店, 1977）。

20 澁川「蔵書の形成」, p. 72。

21 また慶應でのインキュナブラコレクションが充実し始めた 1980 年代から、丸善展など西洋稀覯書の展示会が定期的に行われるようになったが、これも 1970 年以降の収書方針と連動した動きのように思われる。インキュナブラに関連する稀覯書展覧会については本稿の末尾にある付録 1–1 を参照されたい。

年代記』（IKUL 006;[22] 請求記号 120X @ 494 @ 1）は、19 世紀最大のキャクストン本収集家、第 6 代デヴォンシャ公爵（6th Duke of Devonshire, William Cavendish; 1790–1858）の旧蔵書である。この本は、1915 年の売り立てに出されると、アメリカの鉄道王にして稀代の美術・古書蒐集家であったヘンリー・E. ハンティントン（Henry E. Huntington; 1850–1927）の手に渡った。その後、英文学関係のコレクションで有名なロデリック・テリー（Roderick Terry; d. 1933）、ハーバード大学の Houghton Library の創設に寄与したアーサー・A. ホートン Jr.（Arthur A. Houghton Jr.; 1906–1990）の蔵書に入り、1979 年のクリスティーズ（Christie's）の競売にかけられ、イギリスの古書店の老舗バーナード・クォリッチ社（Bernard Quaritch Ltd.）経由で同年 12 月、慶應義塾図書館に収蔵された。キャクストン本というだけでも、印刷史、書誌学、古書の世界できわめて重要な書物とされるが、このように華やかな来歴をもつと、書物の価値はさらに高まるのである。この他にも、慶應のインキュナブラコレクションには、19 世紀前後に活躍した著名な愛書家の旧蔵書が複数ある。その代表例をまとめると次の表のとおりである[23]。

22　IKUL とは Incunabula of the Keio University Library の略で、各コピーに収蔵の古い順に番号が付されている。

23　こうした購入本以外にも、愛書家として名高い故・高橋誠一郎経済学部名誉教授や故・安東伸介文学部名誉教授からの寄贈本もあることも併せて記しておきたい。

IKUL	請求記号	著者・書名など	来歴
007	143X6 @2@1~2	ヴァンサン・ド・ボーヴェ『自然の鑑』 Vincent de Beauvais, *Speculum naturale* ([Strasbourg, 1476])	Herschel V. Jones（1861–1928; 美術蒐集家）＞Eric Sexton, F. S. A（古書蒐集家）＞Sotheby's の 1981 年の競売＞Bernard Quaritch ＞慶應義塾図書館（1981 年）
009	143X4	ヴァンサン・ド・ボーヴェ『諸学の鑑』 Vincent de Beauvais, *Speculum doctorinale* ([Strasbourg, between 1477 and 11 Feb. 1478])	同上
008	143X5 @1	ヴァンサン・ド・ボーヴェ『道徳の鑑』 Vincent de Beauvais, *Speculum morale* (Strasbourg, 1476)	Franciscan Canon in Polling（18 世紀）＞同上
013	120X @620@1	アリストテレス「著作集」 Aristoteles, *Opera* (Venice, 1496)	Pillone Library ＞ Sir Thomas Brooke, F. S. A.（1830–1908; Bart. of Armitage Bridge; 古書蒐集家）＞ Pierre Berès（パリの古書店）＞ Sotheby's の競売＞ Cavendish Rare Books（ロンドンの古書店）＞慶應義塾図書館（1984 年）
014	120X @621@1	ドゥンス・スコトゥス『任意討論集』 Duns Scotus, *Quodlibeta* (Venice, 1477)	Walter Goldwater（ニューヨークの書店）＞ A & C Sokol（ロンドンの古書店）＞慶應義塾図書館（1984 年）
016	142X @36@1	セヴィリアのイシドール『語源論』 Isidorus, *Etymologiae* ([Strasbourg, c. 1473])	Boies Penrose（1860–1921; ペンシルベニア州選出の連邦上院議員、共和党首領）＞ Boies Penrose II（1902–1976）＞ Sotheby's の 1971 年の競売＞丸善＞慶應義塾図書館（1985 年）
027	120X @788@1	アリストテレス『動物論』 Aristoteles, *De animalibus* (Venice, 1476)	Myron Prinzmetal 博士（1908–1987; 心臓学の専門家、古書収集家）＞慶應義塾図書館（1988 年）
034	141X @90@7 @1~6	アリストテレス『著作集』 Aristoteles, *Opera* (Venice, 1495–98)	Joseph Scaliger（1540–1609; フランスの古典学者）＞ Richard Heber（1777–1783; 愛書家）＞ Sotheby's の 1834 年の競売＞ Beriah Botfield（Aldus 版の収集家）＞ Christie's の 1994 年の競売＞慶應義塾図書館（1994 年）
038	120X @1161 @1	ラウル・ルフェーヴル『トロイ歴史集成』 Raoul Lefèvre, *Recuyell of the histories of Troye* (Bruges, [1473?])	Mattew Forster ＞ Sion College ＞ Sotheby's の 1977 年の競売＞ H.P. Kraus（ニューヨークの古書店）＞慶應義塾図書館（1998 年）

上記は現代の愛書家たちの来歴の例で、さらに古い時代の来歴を持つ書物もある。また書物に刻み込まれた歴史は来歴だけではない。書物の読みや実際の使用を伝えるテクストへの書き込みも注目に値する。特に書物が出版されたのとほぼ同時期に活躍した人物の手による書き込みは、同時代のテクストの読みを解読するのにきわめて重要な手がかりとなるのだが、慶應本にはさらなる研究が期待される書き込み本がある。例えば、ライプツィッヒ（Leipzig）でほぼ同時期に出版された版を複数含んだ合綴本（請求記号 120X@860@1）には、印刷時期とほぼ同時代の人物による書き込みが複数の手で施されているのだが、そのなかの一人については既に詳細な研究がある[24]。また今後の研究が待たれるところでは、1492 年にヴェネチアで印刷されたアルフォンソ 10 世の『天文表』（120X@855@1）が挙げられる。この本の見開きや遊び紙には、プトレマイオス、カペラ、プリニウスなどからの引用や本文の訂正など様々な書き込みがなされている。また 16 世紀頃と思われる筆跡で T. Helius Victor Fanestris と署名があり、この人物が書き込みの主である可能性も十分考えられる。今後この本の書き込みを研究することで、16 世紀における天文書の受容の一端を探ることが期待されるところである。

3. デジタルギャラリーの制作

さて、このように所蔵調査・基礎調査から、慶應義塾図書館が所蔵するインキュナブラコレクションの規模とその多様性が明らかとなり、各書物の詳細な書誌データが整った。デジタルアーカイブの構築に向けて次に取

---

24 Kristian Jensen, ‘Exporting and Importing Italian Humanism: The Reception of Italian Printed Editions of Classical Authors and their Commentators at the University of Leipzig’, *Italia: Medioevale e Umanistica*, 65（2004）, 437–97; Stefanie Nartschik, ‘Neo-Latin Verse and its Composition: Introducing the *Sammelband* of Keio University Library’, *Round Table*, 19（2006）, 9–22。

2003 年末	・撮影箇所の選定
2004 年 1 月～ 5 月	・稀覯書の撮影レクチャー（三田メディアセンター・デジタル工房にて）
2004 年 6 月	・撮影開始
2005 年 3 月 31 日	・撮影担当者の任期終了（撮影完了箇所は 35 タイトル 380 コマ）
2005 年 5 月～	・2004 年度未撮影分・追加の画像取得、画像の加工 ・デジタルギャラリーの制作開始
2006 年 5 月	・デジタルギャラリー「インキュナブラ」公開（日本語解題付き） <http://project.lib.keio.ac.jp/dg_kul/incunabula_tbl.php>
2008 年 4 月（予定）	・デジタルギャラリー「インキュナブラ」更新（英語解題付き）

り組むべきは、各書物のデジタル画像の取得とコンテンツの準備であるが、画像取得からデジタルギャラリーの公開まで、実際の作業の流れを簡潔にまとめたのが上記の表である[25]。

今回のプロジェクトで目指したのは、インキュナブラ全点を含む画像付きデジタルギャラリーであるため、各書物の解説には書誌解題だけでなく画像をバランスよく取り込む必要があった。しかし時間的・予算的制約のため、全ページをデジタル化することは現実的ではない。そこで撮影に先立ち、専門家が各書物の代表的なページ（タイトルページ、刊記、来歴を示すページ、書き込みや挿絵のあるページ例など）を選び、優先順位をつけ、それに沿って撮影を進めるという方法が取られた。

高精細画像の取得においてインキュナブラのような稀覯書を対象とする場合、何よりも難しいのは実際の撮影である。なぜなら、書物の大きさ、

25　より詳細な報告については、拙論「研究プロジェクト 1　慶應義塾図書館所蔵 20 世紀映像および音像資料のデジタル情報化 B–4: インキュナブラ」『進化するアーカイヴ――慶應義塾大学デジタルアーカイヴ・リサーチセンター報告書（2001–2006）』（慶應義塾大学デジタルアーカイヴ・リサーチセンター, 2006）, 36–40 を参照のこと。

製本の具合、保存状態といったさまざまな要因によって必要とされる撮影方法も変わってくるからである。今回のプロジェクトの前半では、実際の撮影作業は三田メディアセンター所属のスタッフが担当した。このため撮影担当者は、撮影作業に取り組む前に、稀覯書の撮影の分野で実績を持つ樫村雅章氏（慶應義塾大学 HUMI プロジェクト）から、デジタル撮影技術のレクチャーを受けた。なお 2005 年度より、図書館内に専門家によるデジタル化の業務ラインが確立され、以後、様々な貴重書のデジタル化が組織的に進められている[26]。

画像の用意が整うと、いよいよコンテンツ制作である。ここでは書物ごとに基本的な書誌情報（著者名、タイトル、出版情報など）、詳細な書誌情報（ページ総数、装訂、手書きによる装飾文字、書き込みなどの情報、収蔵年）、解題、そして書物を視覚的に紹介する画像を付したページを作成し、「デジタルギャラリー」という形でまとめた。このギャラリーにはインキュナブラ以外のコレクションも含まれ、義塾図書館の貴重書コレクションを学外に広く紹介することを全体の方針とする。このためインキュナブラのセクションにおいても、最初の公開（2006 年春）に向けては、基本的な書誌情報と解題は日本語で作成した。しかしより国際的な発信を目指して、現在は英語版の公開準備も進めている[27]。

4. 結びに

2007 年 7 月、慶應義塾大学は図書館の蔵書等のデジタル化と公開を Google ブック検索図書館プロジェクトと連携し、共同で行うことを発表した。このプロジェクトの対象は和装本など日本語図書であるが、人類の知を継承・伝達する稀覯書をデジタル化する動きは、今後ますます重視さ

26　なお斯道文庫寄託本は対象外とし、すでに取得済みのデジタル画像については、HUMI プロジェクトの関係者から画像の提供を受けた。

27　この解題は慶應義塾大学に所属の教員、若手研究者（大学院生、ポスドク）、貴重書室スタッフなど 10 数名の協力のもと用意された。

れるであろう。デジタル化が進む利点には、情報が広く一般に公開され、社会に流通することなどが挙げられる。また稀覯書の場合、その利用を必要とする研究者にとって資料へのアクセス制限は最大の関門であったが、デジタル化の発展とともに研究環境の整備が進むことが大いに期待されている。

しかしここで忘れてはならないのは、今回取り組んだような貴重書デジタルアーカイブの構築は、地道な所蔵・基礎調査を大前提とすることである。和漢洋を問わず、こうした調査には対象とするコレクションに関する専門的知識、書誌学的素養などが少なからず求められる。だが特に言語の問題も孕む洋書の場合、現行の体制において、大学図書館スタッフだけで整備を進めることには限界があるように思われる[28]。理想的には、稀覯書管理を専門とする図書館員の養成を組織だって行うことではあるが、現状ではその実現を待っているだけでは前進は難しい。

こうした状況を鑑みると、慶應義塾図書館における稀覯書の整備、保存、そして更なる蔵書構築の発展に向けて、今後ますます期待されるのは、各分野の専門家と図書館スタッフの人的・知的交流の促進や協力体制の充実ではないだろうか。実際これまでにも慶應義塾大学には、研究者主体の展示会開催の折に、稀覯書の解題制作などが進められてきた歴史がある。この伝統を将来にも継承して、発展させていくことはきわめて重要であると思われる。よって筆者自身も一研究者として、今後より広い視野のもと、慶應義塾図書館が誇る歴史的コレクションの整備と発信に積極的に取り組んでいきたいと考えている。

28　大学図書館における洋書貴重書の管理の現状に対する提言として、以下の論を参考のこと。髙宮利行「大学図書館における洋古書管理への不安」『藝文研究』92（2007), 160–68（135–27)。

付録 1：所在調査、書誌作成のために参考にした文献一覧

1–1. 慶應義塾図書館所蔵のインキュナブラを含む展示会目録（開催年順）

高宮利行監修「William Caxton（ca. 1422–91）と慶應義塾大学蔵 *The Chronicles of England* 刊行 500 年展」（1980 年）

高宮利行監修『「キャクストンとアーサー王伝説展」目録』（1985 年）

大江晃監修『「書物に見る西欧哲学・科学思想の流れ」展目録』（1988 年）

高宮利行監修「慶應義塾図書館所蔵 イギリス中世写本・初期刊本：小展示目録」（1991 年）

高宮利行監修『「鵞ペンから印刷機へ」展――目で見る西洋写本文化と印刷文化：展示会目録』（1991 年）

『高橋誠一郎旧蔵古版本西洋経済書展：ユートピアから国富論まで』（1993 年）

慶應義塾大学 HUMI プロジェクト 編集『よみがえるグーテンベルク：デジタル世界への知の継承――グーテンベルク聖書収蔵記念 慶應義塾図書館稀覯書展』（1996 年）

松田隆美監修『寓意の鏡：16・17 世紀のヨーロッパの書物と挿絵』(1999 年)

松田隆美編集『ローマ帝国からイギリスルネッサンス――慶應義塾図書館所蔵稀覯書展／Mostly British: Manuscripts and Early Printed Materials from Classical Rome to Renaissance England in the Collection of Keio University』（2001 年）

1–2. 所在調査等のため調べた慶應義塾図書館目録、図書館報、定期刊行物

大出［*sic*. 大江］晃「写本とインキュナブラのいくつか――慶應義塾図書館所蔵書の展示によせて」『學鐙』85.11（1988), 8–11

『慶應義塾大學圖書館月報』（1954 年 6 月創刊）

『慶應義塾大学圖書館洋書目録』（東京：慶應義塾大学圖書館，1906；1912 年追補刊行）

『慶應義塾図書館史』慶應義塾大学三田情報センター編（東京：慶應義塾三田情報センター , 1972）

慶應義塾大学 HUMI プロジェクト ホームページ <http://www.humi.keio.ac.jp/en/index.html>

「コルディエ文庫」『慶應義塾大学付属研究所斯道文庫　貴重書蒐選図録解題』斯道文庫書誌叢刊之六（東京：慶應義塾大学付属研究所斯道文庫 編纂発行、1997）, pp. 149–52

『コルディエ文庫分類目録』（東京：慶應義塾大学付属研究所斯道文庫，1979）

『三色旗』（義塾図書館貴重書解題を掲載する号多数あり）

澁川雅俊「蔵書の形成」『Media Net』4（1996）69–73

『三田評論』（古い号には貴重書の寄贈者について記録あり）

森園繁「三田情報センター時代のコレクション――資料再発見」『MediaNet』2（1994）, 80–88

Catalogue of the Keiogijyuku Library (Classified)（Tokyo: Keiogijyuku Library, 1929）

1–3. 書誌目録、レファレンス

Bowers, Fredson, *Principles of Bibliographical Description*, introd. by G. Thomas Tanselle（New Castle, DE: Oak Knoll Press, 1994）

Catalogue of Books Printed in the XVth Century Now in the British Museum, vols 1–12（London, 1908–2006）

Copinger, W. *A., Supplement to Hain's 'Repertorium bibliographicum', or Corrections towards a New Edition of That Work*, 2 pts in 3 vols（1895–1902; repr. Milan: Görlich Editore, 1996）

De Ricci, Seymour, *English Collectors of Books and Manuscripts (1530–1930) and their Marks of Ownership*（Bloomington: Indiana University Press, 1960）

The English Short Title Catalogue（ESTC）<http://estc.bl.uk/F/?func=file&file_name=login-bl-list>

Gaskell, Philip, *A New Introduction to Bibliography*（1972; New Castle, DE: Oak Knoll Press, 1995）

Gesamtkatalog der Wiegendrucke, vol. 1–10（1925–38; repr. Stuttgart: Hiersemann（etc.）, 1968–）

Goff, Frederick R., *Incunabula in American Libraries: A Third Census of Fifteenth-Century Books Recorded in North American Collections*, compiled and ed. by Frederick R. Goff（Millwood, NY: Kraus, 1973）

Hain, Ludovico, *Repertorium bibliographicum in quo libri omnes ab arte typographica inventa usque ad annum MD* [...], 4 vols, rev. edn（1826–38; repr. Milan: Görlich Editore, 1996）

The Illustrated Incunabula Short-Title Catalogue on CD-ROM, ed. by Martin Davies, 2nd edn（Reading: Primary Source Media in association with the British Library, 1998）

The Incunabula Short Title Catalogue（ISTC）<http://www.bl.uk/catalogues/istc/>

Proctor, Robert, *An Index to the Early Printed Books in the British Museum from the Invention of Printing to the Year MD, with Notes of Those in the Bodleian Library*, 2 vols（London, 1898）

Ricci, Seymour de, *A Census of Caxtons*, Illustrated Monograph, 15（Oxford: Oxford University Press, 1909）

A Short-Title Catalogue of Books Printed in England, Scotland, & Ireland and of English Books Printed Abroad 1475–1640, first compiled by A. W. Pollard and G. R. Redgrave, 2nd edn, revised and enlarged by W. A. Jackson, F. S. Ferguson, and Katharine F. Pantzer, 3 vols（London: Bibliographical Society, 1986–91）

Yukishima, Koichi, ed., ‘Incunabula’ <http://www.aoni.waseda.jp/yukis/framepage8.html>

——, ed., *Union Catalogue of Incunabula in Japanese Libraries*（IJL）／雪嶋宏一編『本邦所在インキュナブラ目録』（Tokyo: Yushodo, 1995）

——, ed., *Incunabula in Japanese Libraries: Second Edition of Union Catalogue of Incunabula in Japanese Libraries (IJL2)*（Tokyo: Yushodo, 2004）

1–4. 研究論文

天野敬太郎「インキュナビュラについて」『図書館界』4.2（1952）, 68–90

——「本邦所在インキュナビュラ総合目録」『図書館界』4.3（1952）, 114–16

富永牧太「インキュナブラの本邦所在目録 I–IV」『ビブリア』29（1964), 110–03; 30（1965), 128–13; 31（1965), 144–28; 33（1966), 128–23

雪嶋 宏一「インキュナブラ書誌の歴史（1)」『早稲田図書館紀要』33（1991.1), 1–20

——「インキュナブラ書誌の歴史（2)」『早稲田図書館紀要』34（1991.3), 99–104

——「インキュナブラの書誌記述」『書誌調査 1992』（書誌調査研究）（1992.6), 253–59

——「インキュナブラ目録の要件」『書誌調査 1993』（書誌調査研究会）（1993.9), 260–62

——「本邦所在インキュナブラ目録」『私立大学図書館協会会報』101（1994), 67–77

——「世界書誌の可能性：ヨーロッパの最近の動向」『書誌調査 1994』（書誌調査研究会）（1994.9), 142–44

——「本邦所在のインキュナブラ調査」『第 14 回西洋社会科学古典資料講習会』（一橋大学社会科学古典資料センター）（1994.10), 12–15

——「『本邦所在インキュナブラ目録（IJL)』について」『書誌索引展望』（書誌索引家協会）20.4（1996.11; 実際の刊行は 1997.11）

——「本邦所在インキュナブラ目録増補改訂のための調査研究」『私立大学図書館協会会報』199（2003.1), 139–52

——「わが国におけるアルド版の調査研究」『早稲田大学図書館』54, 1–54

Yukishima, Koichi, ‘Incunabula in Japanese Libraries’, *Gazette of the Grolier Club*, n.s. 44（1992), 19–25

付録２：慶應義塾大学図書館所蔵インキュナブラに関する研究発表

2–1. 口頭発表

入江伸, 徳永聡子「慶應義塾大学メディアセンターにおける貴重資料のデジタル情報化と公開」文部科学省オープン・リサーチ・センター整備事業　慶應義塾大学デジタルアーカイヴリサーチセンター成果報告シンポジウム 2：HUMI プロジェクトのいま——貴重書のデジタルアーカイヴと応用, 2006 年 2 月 9 日（木）於・慶應義塾大学北館

徳永聡子「慶應義塾図書館所蔵インキュナブラ——目録整備と公開」同上デジタルアーカイヴリサーチセンター公開講演会　初期印刷本のデジタル書物学, 2006 年 9 月 2 日（土）於・慶應義塾大学三田キャンパス東館 6 階 G-SEC Lab

——「慶應インキュナブラプロジェクト——発足からデジタルギャラリー公開まで——」同上主催 Digital Archive Research Center in 日吉フォーラム, 2007 年 10 月 11 日（木）於・慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎 1 階シンポジウムスペース

2–2.　論文、報告書

Tokunaga, Satoko, ‘The First Report of the Keio Incunabula Project’, *Round Table*, 18 (2004), 7–21

徳永聡子「インキュナブラ・プロジェクトの発足と現状」,『MediaNet』11 号（2004）, 29

——「研究プロジェクト 1 慶應義塾図書館所蔵 20 世紀映像および音像資料のデジタル情報化 B–4: インキュナブラ」『進化するアーカイヴ——慶應義塾大学デジタルアーカイヴ・リサーチセンター報告書（2001–2006）』（慶應義塾大学デジタルアーカイヴ・リサーチセンター, 2006), 36–40

Synopsis

Keio University Library and Incunabula: Collecting, Cataloguing, and Unveiling

Satoko Tokunaga

Digitization is increasingly being employed as a means of preserving, improving access to, and advancing research on manuscripts and rare books. In line with this trend, a project to digitize and compile a database on such holdings in the Keio University Library (KUL) has been undertaken by a group of scholars and librarians at Keio University. As a first step, the Keio Incunabula Project, which focuses on the digitization of incunabula codices, was started in 2003; this paper offers a survey of its activities and achievements.

The first task of the Project was to compile a comprehensive list of KUL incunabula. This entailed not only checking original materials held by KUL, but also examining all available resources relating to the KUL collection. This broad survey has succeeded in clarifying bibliographical details of the works while also tracking the chronological development of the collection for the first time. For example, the first incunabule codex acquired by KUL is a copy of Justinus's Epitomae, printed by Christophorus Valdarfer in 1476 [KUL shelfmark 120X@468@1]. The exact year of acquisition is not known, but we can surmise from available information that it came into the possession of KUL between 1952 and 1964. The next task of the Project was to prepare digital images. The aim was not to produce full digital facsimiles, so only

representative pages (such as the title page, colophon, and illustrations) have been digitized with the collaboration of the HUMI Project, Keio University.

The final output has now been published in the Digital Gallery of Keio University Library (http://project.lib.keio.ac.jp/dg_kul/). The incunabula section contains each copy's bibliographical description, a commentary (prepared by scholars and graduate students of Keio), and digital images. The Japanese version appeared in March 2006, and the English version will come in April 2008. In future, the members of the Project hope to extend the scope of this Digital Gallery, for which further collaboration between librarians and scholars will be essential.